

松江城天守が写る新出写真（パート 2）

調査コラム第 11 回および『松江城研究』4 で、「海軍通常礼服装姿の皇太子嘉仁親王ら明治 40 年山陰道行啓一行と地元有力者との集合写真」などを紹介した。今回は、それ以降に見つかった松江城天守が写る新出写真と、これまで紹介した写真の新情報を紹介したい。

1. 秩父宮雍仁親王山陰巡遊に際し、松江城天守登臨直後をとらえた一枚



【写真 1】松江城天守登臨直後の秩父宮雍仁親王と随員（大正 14 年 3 月 14 日午後 2 時 45 分頃）

この写真は、安来市荒島町の仲佐忠治氏所蔵の一枚で、秩父宮雍仁（やすひと）親王（1902-1953、大正天皇の第二皇子）が松江城天守の「御登臨」を終え、案内役の別府総太郎島根県知事ら随員一行とともに天守を退出した直後をとらえたものである。撮影は、残された記録と天守に映る影などから、大正 14 年（1925）3 月 6 日午後 2 時 45 分頃と判断できる。

写真中央に写る横向き眼鏡着用の青年が秩父宮で、陸軍少尉の正服姿に、胸には大勲位菊花大綬章（副章）を着用している。中佐家には人力車に乗る秩父宮の写真も残されており、風貌、軍帽、肩章、大勲位菊花大綬章などが詳しく観察できる。秩父宮は陸軍士官学校卒業後、大正 11 年（1922）10 月に大勲位菊花大綬章を受けるとともに陸軍少尉に任官した。右端を歩く燕尾服姿の人物を別府総太郎（大正 13 年 6 月～同 15 年 9 月の島根県知事）と見たが、この日、別府総太郎は県知事として松江城天守の先導・案内役を勤めていた。

ところで、秩父宮は大正 14 年 2 月 16 日から 3 月 9 日にかけて、九州から山陰にかけて「御見学」のための巡遊を行っている。九州巡遊を終えると山口県に入り、3 月 5 日には山口御旅館を出発、鉄道路で大社駅に夕刻到着した。翌 6 日には早朝に出雲大社参拝、移動に人力車を用いて日御碕神社参拝。大社から松江までは宍道湖南側の町村を自動車で通過し、午後 1 時 10 分に興雲閣に到着。興雲閣での昼餐後、松江城天守に登臨し、午後 2 時 40 分頃に天守降閣、午後 2 時 50 分頃に市内小学校児童の合同体操見学のために二の丸運動場御座所に着席した（『松江市誌』、「島根新聞」、『秩父宮雍仁親王』などより）。

「島根新聞」は、3 月 7 日付夕刊（発行は 6 日夕）で秩父宮の大社・松江巡遊の様子を写真付きで詳しく報じている。大、小見出しには、

「八雲山に瑞雲たゆとふ／けさ大社にご参拝神代を偲ばせらるゝ稲佐の浜国譲りの故事」「伝説に富む日御碕神社へお成り／御沿道の眺望に御興」「御微笑のうちに拳手の礼を賜ひつゝ／沿道に続く万歳の波／湖の面に春光映ゆる日」「栄光に歓喜する松江」「輝きの街、歓びの巷／全市に漂ふ小旗の波／けふ殿下お成りの日の賑わひ」「約六千名の市内小学児童」「午後一時十分興雲閣へ御着」「御弁当式の御昼餐を召さる」「天守閣上から宍道湖の風光を殊の外御賞覧」「六百名の体操にスポーツの宮様お喜び」

などと並んでおり、明治 40 年皇太子嘉仁親王行啓、大正 6 年皇太子裕仁親王行啓に続くような盛大な奉迎が繰り広げられていた。

松江城天守登臨の様子は、紙上で次のよう報じられた。

「天守閣上から宍道湖の風光を殊の外御賞覧／別府知事は更に御先導申し上げて天守閣にご案内申し上げます。即ち殿下には頗る御快活に御歩を運ばせられつつ、うらかな春の射陽を一面に受けて芽ぐみ初めた桜の裸木等を眺めさせられつつ、石段を昇って天守閣の広場にお入り遊ばされ、今更に雄大なそして古雅な天守閣を仰ぎ召されつゝ近侍の人を振返って何等かお言葉を懸けされられたが、聽て楼門のやうな天守閣の入口に知事の先導でその御英姿を没せられた。而して満遍なく照り輝いていた和やかな春光が五彩の綾を織っていた広場か

ら、薄暗い天守閣内にお入り遊ばされたことゝて、急に眼界が迫ったのにもお厭ひもなく、至極活発な御動作にてぐんぐん階段をお登り遊ばされ、臆て第三階にお登りの時、そこに陳列された聖上陛下御座船を初め松平家所蔵の日清、日露両役戦利品等に就き知事の御説明を御聴取遊ばされ薄明の中にも拘はらず御感興深げに御一覽の後、再び知事の御先導で最上層に御登閣あらせられ眼下に迫った松江全市が採光に揺れ輝いている様をいとも御興味深げに御望み遊ばされつゝ、而して又瞳を転じさせられ興雲閣のお眺めに数倍の雄大な景色をご賞讃あらせられつゝ、静かに陽に映え返っている宍道湖を迂るやうに往く発動機船の玩具にも似た姿をお認め遊ばされ、そして其のただ中にポツリと黒く斑点の如く浮んだ嫁ヶ島に御眼を止めさせられ、何か近侍にお言葉を掛けさせられたが、臆て又遙か彼方に白雪を頂いて連っている中国山脈にお眼を転じさせられ、殊の外御機嫌麗しく御興じられつつ、別府知事に一々御下問に相成り。尚一面の明媚な風光を御賞讃遊ばされつゝ、扈従の人々を顧みられお物語あり。斯くて午後二時四十分頃再び別府知事の御先導にて御降閣あり。俄かに斜になった明るい春光を背に浴びさせられつゝ軽快な御徒歩にてこの丸広場に於ける市内小学校児童の合同体操場へお成りになった。」

秩父宮雍仁親王山陰巡遊時の、松江城天守登臨直後と判断できるこの写真は、残された記録から撮影時の状況がよく分かる一枚である。



蛇足ながら、この写真を一見した時には、眼鏡着用の青年を大正 6 年（1917）行啓時の皇太子裕仁親王ではないかと推測してみたが、大正 6 年の松江への行啓は 7 月 6 日のことであり、写真に写る樹木（桜）の季節感とは合わない。『松江市誌』、「島根新聞」などと照合する過程で上記の結論に至った次第であるが、裕仁親王も大正 6 年 7 月 6 日に松江城天守に登臨していることから、今後同じような写真が見つかって不思議ではない。ちなみに、この写真では「石落し」から右下に伸びる影が確認できる。調査コラム第 18 回「松江城天守の光と影」で紹介したように、天守に映る光と影により写真の撮影時期や時刻は概ね推定でき、手持ちの写真と比較すると 3 月初旬頃の午後 2～3 時頃と推定できる。記録に残る秩父宮の天守退出時刻と天守に映る影とに矛盾はない。なお、大正 14 年山陰巡遊時には秩父宮により興雲閣前に銀杏樹が植樹され、父嘉仁親王行啓時（明治 40 年）及び兄裕仁親王行啓時（大正 6 年）の御手植え松と並んで大樹となっている。

【写真 2】興雲閣前の銀杏樹（中央）と 2 本の御手植え松（右奥）

2.詳細に写る明治8年の松江城天守



【写真3】明治8年松江城古写真

上の松江城古写真は三之丸正面付近から天守及び二之丸、三之丸内の建物を撮影したものである。建物の一部が解体され始めており、撮影時期は天守以外の建物が取り払われる明治8年（1875）5月頃で、松江城天守を写した写真としては現存する3番目に古いものである。これまでも多くの書籍等で紹介されており、平成30年（2018）3月発刊の『松江市史』史料編「松江城」第13章（写真資料）でも「松江城古写真（明治初年から明治27年まで）」の一枚として詳しく紹介した（写真13-3）。

この写真は、ガラス乾板から印画紙に直接焼き付けたのではないかとと思われるほど高精細なプリントが伝わっており（松江市蔵、松江城・史料調査課保管）、『松江市史』「松江城」への掲載のために市内専門業者に撮影委託し、高精細なデジタルデータを作成していた。

『松江市史』「松江城」発刊からしばらくたった今年の3月22日、F社の担当者2名により、最新鋭デジタルカメラを用いて写真撮影をしていただく機会があった。カメラは文化財・美術品などのデジタルアーカイブ・研究分野に導入されている「FUJIFILM_GFX100」で、1億画素の高解像撮影が手軽に実現できるとの機種である。当日は、実演用の撮影素材として、上述の「明治8年松江城古写真」の他、調査コラム第11回で紹介した「明治27年（1894）松江城天守大修理後に撮影された松江城天守の姿」、「海軍通常礼服姿の皇太子嘉仁親王ら明治40年山陰道行啓一行と地元有力者との集合写真」を提供した。

撮影が終わり、パソコンでデータを見て驚いた。これまで経験したこともない1億画素という高精細さに加え、史料調査課の一般的なパソコンでも想像以上に画像をスムーズに操ることができる。「明治8年松江城古写真（15.1cm×19.6cm）」から天守部分や月見櫓あたりを

トリミングし、A2サイズ（42.0×59.4cm）くらいまで拡大してみたが、画質は良く粗さは目立たないので、もっと拡大しても大丈夫なのかもしれない。



右【写真3の部分拡大1】
明治8年、松江城天守の姿

左【写真3の部分拡大2】
明治8年、壊されゆく松江城（月見櫓・南櫓・三之丸御殿正門）



【写真3の部分拡大3】月見櫓の屋根には解体作業中の人物が複数写る

デジタル技術が進むと、これまであまり拡大できなかった明治8年の松江城天守の姿を大写して鮮明に見ることができるようになった、という情報紹介だが、これも一つの新出写真なのかもしれない。

3. 「皇太子嘉仁親王ら明治 40 年山陰道行啓一行の集合写真」のその後



【写真 4】皇太子嘉仁親王ら明治 40 年山陰道行啓一行と地元有力者との集合写真

(1) その後の情報

令和 3 年 2 月に確認した一枚の写真は、調べる過程で「皇太子嘉仁親王ら明治 40 年山陰道行啓一行と地元有力者との集合写真」と推定し、第 11 回調査コラムで紹介した。公開してから約 1 年が経過したが、この間、「山陰中央新報（10 月 1 日付一面トップ）」、「毎日新聞（10 月 13 日付全国版）」などにより、日本近代史の専門家の見解を求めたうえで報道された。

広く周知されたことにより多くの反響があったが、その中で写真史・写真師研究家の森重和雄氏から、嘉仁親王と想定した人物は東伏見宮依仁親王であり、皇太子の右隣りで東郷平八郎と想定した人物は片岡七郎であるとの指摘を受けた。写真史に造詣の深い貴重なご意見と思わ

れたので、皇族の来訪を改めて調べなおしてみたが、今までのところ、“東伏見宮依仁親王、片岡七郎が松江を訪れ、松永武吉島根県知事・福岡徳世松江市長・多くの通常礼服姿の海軍軍人・多数の地元有力者たちと松江城天守の前で集合写真が撮られる”、という状況を少しでも記述したり彷彿させる史料を見つけることはできていない。

やはり、「海軍通常礼服姿の皇太子嘉仁親王ら明治 40 年山陰道行啓一行と地元有力者との集合写真」と考える蓋然性は高いと思っているが、松江の歴史の奥深さを示す一枚として、今後とも検討は継続されるべきものと感じている。それにしても、写真は多くの情報を視覚的に伝えてくれる貴重な史料であり、一方で、写った人物の特定は意外と難しいと改めて思った一年間だった。

(2) 奥原啓三家に伝わる御下賜の銀貨



写真に直接関わることはないが、新聞報道をきっかけに松江市大野町在住の奥原啓三氏から明治 40 年山陰道行啓時の御下賜の銀貨が奥原家に伝わっているとお持ちいただいた。

お持ちいただいた銀貨は、「明治四十年」の刻印をもつ旭日五十銭銀貨 2 枚で、「金壹圓」と記された封筒に入れられていた。封筒はさらに封紙で包まれ、表に「酒肴料」と記されるとともに、「奥原大野村長」と記された貼紙が付されていた。

島根県の公式記録である『皇太子殿下島根県行啓日誌』には、明治 40 年 5 月 25 日の出来事として、「御下賜此日松江御旅館ニ於テ左ノ御下賜アリ」「酒肴料金百五拾円」とあり、拝受人名の一人に啓三氏の曾祖父にあたる奥原三七氏の名が大野村長として載る。奥原家では山陰道行啓を記念する名誉の品として、当時の伝承とともに大切に受け継がれていたのである。

【写真 5】奥原啓三家に伝わる御下賜の銀貨（旭日五十銭銀貨二枚）

お願い

松江城・史料調査課では、松江城天守が写る古写真を収集しています。写真は多くの情報を視覚的に伝えてくれる貴重な史料で、松江城研究を進めるうえでも大切なものです。天守が写る写真であれば、撮影された時の様子が分からなくなっても、これまでの研究成果から撮影時期・時刻、状況などを説明できる場合があります。ぜひ、下記まで情報をお寄せください。

松江城・史料調査課：（担当）稲田 信

（住所）松江市学園南 1 丁目 20 番 43 号

（電話）0852-55-5594

（メール）shiryo-hensan@city.matsue.lg.jp

（松江市松江城・史料調査課副主任行政専門員／稲田信／2022年5月16日記）